



伊賀の地を愛し「家が  
がいちばん、ええ」  
が口癖だったという、  
榊莫山さん  
(撮影／太田健嗣郎)

## 巻頭特集 人皆直行我独横行

# 榊莫山の世界

日本を代表する書家、榊莫山さん。

2010年、84歳で鬼籍に入るまで、伊賀の風土を愛し

素朴で自由奔放な「詩書画一体」の画風を生み出し活躍しました。

書壇から離れ、ひとりで書の道を極めようと研究を重ねた

莫山さんの、創作にかけた思いをひも解きます。



いずれは故郷に帰る予定で、アトリエを準備していた莫山さん。アトリエは「榊庵」と名づけました。「榊」とは「拍子木、または拍子木を打つこと」を意味します

### 書壇から離れ ひとり創作の道へ

「人は皆真つすぐ進むが、自分はひとり横に行く」を意味する「人皆直行我独横行」を座右の銘とした榊莫山さん。テレビ番組の題字を手がけるなど、「ばくざん先生」の愛称で親しまれ、メディアにもたびたび登場しました。大手酒造会社の焼酎のCMがとりわけ印象に残っている、という人も少なくないでしょう。地酒や焼酎のラベルを数多く書した莫山さんでしたが、自身はまったくの下戸だったそう。

もともと絵描きになりたかった莫山さんは、三重師範学校(現・三重大学教育学部)に入学し、絵画と書の両方を学びました。しかし第二次世界大戦が始まると、西洋絵画に携わること自体がはばかれる風潮に。父親が小学校の校長であったこともあり、次第に絵画と距離を置くようになり、後に美術教員として勤務する傍ら、京都大学文学部に内地留学し美学を学びます。

1946年、奈良在住の書家・辻本史邑の門下となり、本格的に書の世界へ。日本書芸院展で最高賞を受賞するなど20代から注目を浴びますが、1958年辻本さんの死を機に、特定組織に属さず、ひとりで書の道を歩むことを決意します。おおらかで大胆、素朴、時にユーモアを感じる作風で有名ですが、それは圧倒



1.数々の名作を生んだ筆 2.莫山さんは、自らの作品はアトリエ内に留め、生活スペースには元永定正さんやアントニ・タビエスなど好みの作品をかけ愛でました。「亡くなって初めて、父の作品を居住スペースに飾りました」とせい子さん 3.勉強家だった莫山さんのアトリエに設えられた書斎 4.アトリエ内の制作スペース。亡くなる前に拾った落ち葉や、今では稀少な和紙、筆や絵皿がそのまま残されており、莫山さんの気配が感じられます

### 孤高の莫山さんを支えた 家族・友人との絆

1952年、自らを高めるべく、莫山さんは活動の拠点を伊賀から大阪へ移しました。しかし大阪に出てすぐ、二歳の長男を病で亡くします。以降、息子に對

する鎮魂の念を込め、個展ごとに「般若心経」をしたためました。せい子さんは「頑張らなければ申し訳ない」という息子への思いが、書壇から離れ、ひとり道を歩む父を奮い立たせていたのでは」と当時を顧みます。

大阪時代は、詩人の草野心平さんや作家・田辺聖子さんらと交流を深めました。文学やアートの世界を自由に横断し刺激を受けた、このころの経験が、後に確立された「詩書画一体」の源となっているのかもしれない。中でも、古くからの友人であり、同じ伊賀出身である画家の元永定正さんとの親交は、長きにわたりました。「ああ見えて父は、人付き合いが苦手な人。友人と言えるのは元永さんと二人で過ごす時間を、莫山さんほととでも大切にしていたといえます。

莫山さんの制作活動を支えたのが、妻の美代子さんです。「父と母は、書について密に話し合いました。エッセーや

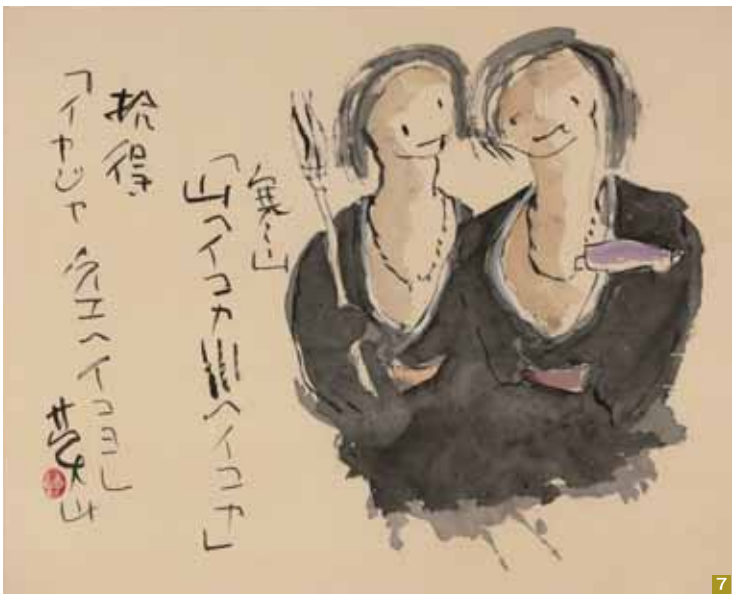
新聞連載の原稿に最初に目を通すのも、エッセーのテーマ探しや作品のイメージを膨らませるため、車で父をあちこちに連れていくのも母の役目。意見をぶつけ合うことも多かったようですが、父は母を『戦友』と称えていました」とせい子さんは振り返ります。「気温、湿度に敏感に反応し、発色が変化する墨。ともしれば簡単に出来上がる作品だと勘違いされがちですが、一人きりでアトリエにこもり、何時間もかけ納得のいくまで制作にあたるのが常でした。父が身体を壊してからは、墨をする役目を母が担っていました」と、最後まで二人三脚だった夫妻の様子を教えてくださいました。

### 作家が愛した 伊賀の風土

50歳を過ぎ伊賀に戻ってからは、自然に着想を求め、素朴な絵に言葉添えた独自の「詩書画一体」の作風を確立します。「伊賀八景」や自邸の庭で採取した



5.伊賀の風土を愛した表れに「伊賀八景」があります。野城石垣、赤目の滝、青山高原、木津川、雲山、芭蕉翁故郷塚、崇廣堂(藤堂藩藩校)、莫山氏の自宅近くにあると思われる湯屋谷の寺の赤門の8か所が描かれました。写真は「伊賀八景/赤門(崇廣堂)」6.元永定正さんとのコラボレート作品「誰モキナイ」。互いを補いあう、天賦の友とも言える関係でした 7.人物や仏像も好んで描いた莫山さん。その中で最も多い主題が「寒山拾得」です



「根は優しく、決して強要することがない父でした。ただ作家としての厳しい一面を知っているだけに、威厳を感じ、一歩引いて父の後ろ姿をみていました」娘、榊せい子さん

ものを描いた作品は、この地に住むからこそ生まれ得た作品といえるでしょう。どの作品からも、モチーフに対する莫山さんの温かな眼差しが感じられます。「父の制作の根底に流れるのは、生きとし生けるものに対する愛情でした」とせい子さんは話します。誰の心にもすつと入るよう、難しい語句を使わない姿勢も、童謡を愛し時折くちずさんでいたという、莫山さんならではの。豪快な印象とは裏腹に、繊細で負けず嫌い。自分にしか出来ない創作を探究し続けた莫山さん。「立つ鳥跡を濁さずといいますが、作品のほとんどを三重県立美術館へ寄贈し、葬式不要の遺言を残し亡くなりました。80代に入ってから、納得できる作品ができないから、と制作活動もセーブしていました。みなさんに元気な頃のイメージを持ち続けていただきたかったのかもしれない」とせい子さんは、晩年の莫山さんについて語ります。この地域では、和菓子「いせや」の看板や包装紙、有限会社シバタカ写真場アポロ興産株式会社の看板などで、莫山さんの文字を目にすることが出来ます。身体ばかりか、気持ちまで強ばってしまっている。莫山さんのおおらかな世界の一端に触れ、ふっと心をゆるめてみませんか。



亡くなった年の5月、最も多く書いた「土」の文字をあしらったモニュメント。脇の石に座り、庭を眺めるのが莫山さんの日課でした